Center for Redevelopment of Pollution-damaged Areas in JAPAN

# Libella

No.109
（隔月1日、年6回発行）

2009年
7月

# 交通まちづくり

「交通のこと　いっしょに考えましょう」――大阪大学、京都大学、あおぞら財団が協働する「西淀川・交通まちづくりビジョン研究会」主催の意見交換会を6月21日、西淀川区民会館で開催しました。

意見交換会には、事前に無作為抽出した2000人のアンケート回答者の中から参加希望者20人が参加。「なんとかしたい！この問題～交通の困りごとあれこれ～」（前半）「10年後の西淀川～こんなまちなら住みたいな～」（後半）のテーマで活発に話し合いました。参加者の西淀川への「愛着と誇り」あふれる意見やアイデアがたくさん出されました。次回意見交換会（7月26日）では、今回の意見をふまえて①専門家から交通の問題を解決する手法の提案、②提案について、討議と投票を行う予定です。秋には結果をふまえて、公開討論会を開催する予定です。

●目次

**特　集　西淀川ESD 2年間の軌跡**
**～ 環境省モデル地域として ～**

〈SHITEN〉地域に根づいたESDの要素とは　廣田　学　2
西淀川でのESDを振り返って　林　美帆　4
談話でつづる西淀川ESD　あんなこと、こんなことがありました
辻幸二朗先生、山本康子さん、柏原誠先生　6
「緑陰道路サロン」と出前授業　天野憲一郎　8

〈シリアからの手紙〉②美しい夕焼け　中野　貴行　3
〈リレーエッセー〉「想い」を伝える仕事　池田　風弥　10
〈忙中一筆〉向こう三軒両隣のコミュニケーションが…　蒲田　雄輔　12

# 特集 西淀川ESD 2年間の軌跡 ～環境省モデル地域として～

公害で苦しんだ西淀川地域ならではのESDにしようと、様々な人たちと２年間実践してきました。２年間でどういうことが見えてきたか、エッセンスと「楽しい雰囲気」をお伝えします。

## 地域に根づいたESDの要素とは

廣田　学

### ESD「地域担当者」

環境省は２００６年度から２００８年度にかけて、「地域におけるＥＳＤ実践」の促進を目的に「国連ＥＳＤの10年促進事業」（以下、「促進事業」）を実施し、全国14地域がモデル地域に採択されました。大阪市西淀川地域もその１つとして、２００７年度から２年間「持続可能な交通まちづくり市民会議」というテーマで事業を実施しました。

私は、各モデル地域に１人ずつ配置された「地域担当者」として２年間西淀川地域を担当しました。地域担当者は、東京にある促進事業の全国事務局（ＥＳＤ―Ｊが担当）と地域をつなぐ連絡役で、西淀川地域の活動内容や実施状況を報告したり、西淀川地域の事務局が提出する各種資料の作成協力やアドバイスなど、円滑な事業推進のための一端を担いました。

### 西淀川ESDが成功した2つの要素

促進事業としての西淀川地域の２年間の取り組みは、採択された14地域の中でも〝成功〟事例の１つであったと、環境省や全国事務局も評価しています。西淀川地域が成功した要素は何だったのか？ＥＳＤというわかりにくい概念を地域に根ざすことができた要素がわかれば、まさに先行事例として全国的にＥＳＤを普及していくことも可能です。

例えば、菜の花プロジェクトというわかりやすい取り組みがあったこと、いろんな参加者を巻き込んで取り組めたこと、地域の関係者と何度も話し合いをしたこと、事務局を担ったあおぞら財団が積極的に取り組んだことなど、その要素を考えてみると多様で、どれをとっても大切なことです。ただ、その中でも、①ＥＳＤの本質をしっかりとらえて、環境課題に教育的に取り組めたこと、②活動の連携ができたこと、の２つが重要だったのではないかと考えます。

### 教育事業としての明確化

一般的に地域で取り組まれている環境活動の多くは、その地域の環境保全を目的に〝持続可能な開発〟をめざした地域づくりを行っています。そうした地域づくりを実現するために、環境学習の推進や次世代を担う人材育成に取り組むなど、環境保全活動の中にＥＳＤの本質が入っています。しかし、促進事業の他地域の中には、持続可能な地域づくりはよくできたが、教育事業として欠落していたケースもありました。ＥＳＤは「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development）」の略ですが、〝のための教育〟（Education for）という部分がなく、活動にＥＳＤの要素を持ちながらもしっかりと認識していなかったために、単なる環境保全活動になってしまったのです。

それに対し、西淀川地域では、菜の花プロジェクトを進めていくにあたり、「西淀川高校などで収穫できる菜の花の量は限られており、菜の花栽培から西淀川地域の循環型社会構築までの流れは難しいので、量的には廃油回収でめざしていくこととし、菜の花栽培に関する一連の取り組みは教育的効果として進めていこう」と早い段階で事務局会議において整理され、それに基づいて活動することができました。つまり、ＥＳＤの本質をしっかりとらえて、環境保全活動にとどまらず、教育事業としての取り組みを明確化させることができました。

### 異年齢集団の刺激、学校の先生の協力

もう１つの要素としては、活動の連携ができたことです。菜の花プロジェクトのＰＲを兼ねた緑の募金の実施や、西淀川区民まつりへの出展、廃油回収の仕組みづくりなど、学校と地域のつながりを持つような取り組みができました。西淀川高校のエココミュニケーションクラブ（ＥＣＣ）の地域の清掃活動なども、地域を意識した取り組みであり、促進事業の内容ともリンクしました。また、ＥＳＤの事業を通じて、小学生から大学生までが一緒に活動した学校間連携も成功の要素です。大学生が高校生に、高校生が小学生に教えたりする中で自

# 視点 SHITEN

環境再生にかかわる課題を、さまざまな視点から自由に論じるコーナーです。

覚が芽生えてきたり、小学生や中学生のがんばりが高校生を刺激したり、異年齢集団が一緒に行動し学びあうことは、日常の学校生活では難しく、ＥＳＤの取り組みならではです。これらの連携ができた背景には、あおぞら財団と各学校が公害学習などを通してこれまでにつながりがあったことや、ＥＳＤの本質を理解した学校の先生が積極的に協力したことを忘れてはいけません。

## 当たり前のことができること

ＥＳＤの取り組みに成功した西淀川地域の２つの要素は、一見すると非常に当たり前のことのように思われます。しかし、この非常に当たり前のことができているところは、決して多くありません。私は、西淀川地域の隣にある豊中市地域で環境保全に取り組む団体に所属していますが、西淀川地域のような要素を当たり前に実施するのは大変なことだと感じます。ただ、昨年12月に豊中で実施した「とよなか市民環境展２００８」には、西淀川高校生にもＢＤＦ精製機の展示と綿菓子の販売で参加いただき、豊中で活動する多くの大人が刺激を受けました。地域に根ざした西淀川地域の取り組みは、豊中のような他の地域にとっても学ぶところは多く、促進事業としてさまざまな成果を残しました。促進事業は終了しましたが、今後も西淀川地域のさらなる発展が期待されます。

（ひろた・まなぶ　特定非営利活動法人とよなか市民環境会議アジェンダ21）

## シリアからの手紙

中野 貴行

### ② 美しい夕焼け

もう少しで日が暮れる。それを空腹のまま待ち続ける。動けない、動きたくない。やがて、モスクからアーザーンと呼ばれる祈りの音が村に響くと、「時間だ」と、コップを差し出された。水を飲み干し、目の前のご飯にむさぼりつく。夜明け前の朝4時から飲まず食わずだった体に染み渡る。夕焼けが空を焼くのを幸せな気持ちで眺めた。

イスラム暦で「ラマダン」と呼ばれる月がある。この一ヶ月、信者は「断食」を行なう。日が出ている間、食べるだけでなく、飲むこと、喫煙、性交も行なわない。「なんでそんなことを」と思わず考えてしまうが、いざ聞いてみると「いちばん好きな月だ」と言う人は多い。

「断食」はイスラム教徒の義務だ。天国に行くための行為であると共に、世界中の富める者も貧しき者も平等に空腹を感じる機会でもある。寄付を行い、日没後に食事を共にするのもラマダン月の日常だ。そして、「世界では10億人が飢餓の状態にあり、毎日1万6千人の子供が餓死している」（Bread for the World、下記ホームページ参照）

断食をしていると、ご飯の時間に合わせて生活時間を変えなくてはならないし、空腹で喉が渇き、仕事が非効率になる。しかし、自分で自分の思うように過ごせない日々に偉大なる神の存在をほのかに感じながら、食べられるありがたさを噛み締める30日は、僕にとっても好きな月となった。日本に居る時には気付かなかった美しい夕焼けが、明日を連れてくる。世界の誰もが、明日が来ることを怯えることなく、夕日を待ち望めますように、と願う。

（なかの・たかゆき　青年海外協力隊19年4次シリア村落開発普及員）

日没後の食事

http://www.bread.org/learn/hunger-basics/hunger-facts-international.html

# 西淀川でのESDを振り返って

林　美帆

あおぞら財団では西淀川公害の学習プログラムづくりや、交通環境教育の教材作り、子ども達との自然観察、地域調査や提案づくりなどに取り組んできました。これらの活動は、ボランティア中心に進められ、事務局をあおぞら財団が担う形式で行われてきましたが、活動を続けていく中で、もっと多くの人に参加してほしいという悩みを抱えていました。

## 持続可能な交通まちづくり

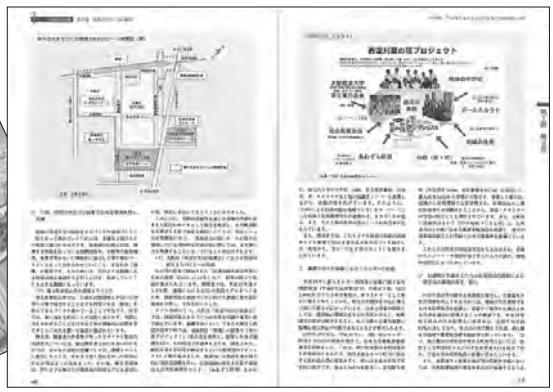
丁度その時期に、「ESD（持続可能な開発のための教育）」という概念と、環境省がモデル地域を募集していることを知りました。これまでの活動を飛躍させるために、モデル事業に応募し、2007年度、2008年度と2年間「持続可能な交通まちづくり市民会議」と題して活動することになりました。

2007年度は西淀川地域で熱心に環境教育を進めている小・中・高校・大学の先生方や、ガールスカウト等の青少年活動の指導者、地域の社会教育施設、行政の担当者、地域の人々など、多様な顔ぶれを集まり、お互いが「何をしているか」「どういう悩みがあるか」「どうしていきたいか」ということを共有するところから始めました。お互いの悩みを聞いているとたくさんの共通課題が見えてきました。それは「人と人とのつながりが切れている」ということです。環境問題に留まらず、伝統や歴史の継承、コミュニティのことなど地域を知らない人が多いことや、学校間や学校と地域とのつながりがうすいこと、子どもと老人の間でも様々なギャップがあるとか、いろいろと「つながり」が切れている中での問題がわかったのです。その中で「小・中・高校・大学の枠を超えたつながり」「意欲ある人と人をつなげよう」「地域と学校をつなげよう」「楽しいことでつなげよう」を実践したいという意見があがりました。

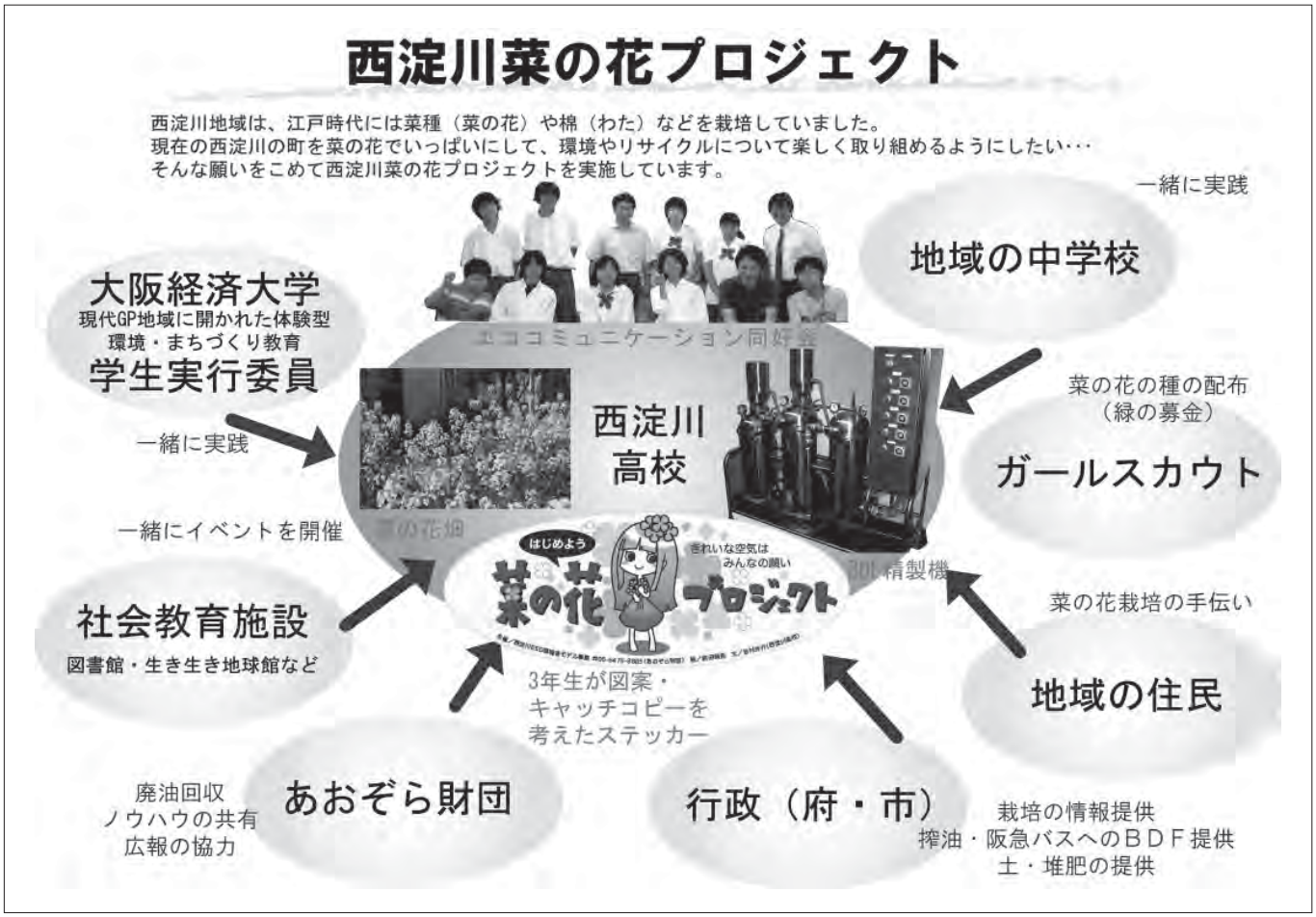
## 菜の花プロジェクトでつなぐ

集まっている人たちは、色々な活動の場を持っている人たちです。その中で大阪府立西淀川高等学校は菜の花プロジェクトを行っていました。菜の花プロジェクトとは、菜の花を栽培し、観察して楽しみ、その後タネをとり搾油して食用油として利用した後に、バイオディーゼル燃料（BDF）にしてリサイクルする取り組みです。西淀川高校には菜の花畑と、廃油をバイオディーゼル燃料に変換する精製機を持っていましたが、スタートしたばかりで手探り状態でした。地域を巻き込みながら菜の花プロジェクトを実現できれば、新たな「つながり」を「楽しく」作っていけるのではないかと話し合いました。

具体的には、2008年度は菜の花の収穫作業、脱穀、畑の開墾、種まき、草取りなど、一連の農作業を高校生だけではなく、中学生や大学生、地域の人たちと一緒に行いました。中学生は大阪市中学校教育研究会特別活動部の活動の一環として、菫中学校・梅南中学校・淀中学校の3校が参加しました。大学は大阪経済大学の現代GP「地域に開かれた体験型環境・まちづくり教育」




環境白書に活動が紹介されました




に参加する学生と先生方です。

その他にも、菜の花プロジェクトを広く知ってもらおうと、広報活動を行いました。西淀川高校3年生全員にステッカー図案とキャッチフレーズ案を考えてもらい、西淀川ＥＳＤの会議で優秀案を選びステッカーを作ったり、ガールスカウトが毎年行っている緑の募金に高校生と中学生も参加して菜の花の種付きの栽培ガイドを募金してくれた人に配ったり、地域のお祭りに出展してＢＤＦで発電した電気を使って綿菓子を製造しました。さらには菜の花学会での活動報告や大阪市の環境情報センターや図書館で子供向けの講座などを行いました。これらの活動は、一つの団体だけではなかなか実現し得ないことです。色々な団体が自分の資源を出し合い、助け合い、情報を共有する中で新しい関係性が生まれ、実現したものです。

## 新しい体験が「楽しい」

参加者の感想を見ると「ふつうでは出会うことのない人たちとこの活動を通して、貴重な体験ができている今がとても楽しいです」「社会に出る自信につながった」とありました。このＥＳＤの取り組みのポイントは異年齢の交流です。その効果として3点ほどあげることができます。

1点目は「教えられる」体験です。大学生が高校生に、高校生が小学生に教えたりする中で、しっかりしようという自覚が芽生えてきたり、中学生の頑張りが高校生を刺激したり、小学生のはつらつとした姿に高校生や中学生もがんばろうと思えたり、教え教えられる場面で生まれる刺激でお互いが元気になることができました。

2点目は「伝える」体験です。普段行動を共にしない人たちと交流するには「伝える」ことに努力しなければなりません。他者へ伝える経験を繰り返すことで自信がついたようです。

3点目はいろんな視点を知る体験です。教える立場（先生）と教えられる立場（生徒）とは違う立場の人（第三者）がそばに寄り添うことで、子どもたちは同級生の友人だけでなく、異年齢、社会人と接する中で、物事の視点が増えたようです。これらの新しい体験が「楽しい」につながったのではないかと考えられます。

つまり、ＥＳＤはコミュニケーション能力を養う場だと思います。色々な主体がつながることで、個人でやってみたいと思っていても実現不可能だったことが可能になり、良い関係性を広げていくことができるといえるでしょう。西淀川で生まれた良いつながりの輪をこれからも広げたいと考えています。

（はやし・みほ　あおぞら財団研究員）

東淀川区民まつりで廃油回収
（2008年9月21日）

# あんなこと、こんなことがありました

## から談話を寄せて頂きました ～

## 菜の花プロジェクト（菜の花栽培）

辻 幸二郎先生（西淀川高校）

### 「環境」の授業（科目「環境」は公民科の現代社会を発展させた内容をもつ3年の2単位の必修科目として設置）

西淀川高校３年生が考えた菜の花プロジェクトのステッカー図案とキャッチフレーズ

「環境」の授業の中で菜の花プロジェクトの内容を学習した上で、「西淀川ＥＳＤ」のステッカーのデザインを生徒達に作ってもらった。キャッチフレーズとデザインとで合計２時間分の授業しか取らなかったが、生徒達は楽しくというより気楽にのびのびと取り組んでくれた。各クラスで予選のコンペを行い、その選ばれたものの中から「西淀川ＥＳＤ」の全体会議の場で地域のさまざまな代表の方により優秀作品を選んでいただき最終決定した。

選ばれた生徒の中には、生活や家庭の状況も厳しく学校生活になかなかなじめない生徒もいたが、とてもうれしかったのか親戚中に言い回ったということもあった。自尊感情の低い生徒の多い中、自信につながったようである。この取り組みは、環境問題や社会の問題が自分と関係があるものである、という感覚を持ってくれるのに役立ったと思う。

ECCメンバーと大学生・中学生が一緒に菜の花畑を耕す（2008年８月）

### 西淀川高校エコ・コミュニケーション同好会（ECC）の結成

生徒達の中から、自分たちで続けて活動をしていきたい、との声が出てきた。何人かの生徒に呼びかけると、部活動としてやりたいという話になり、「環境部」をつくることになった。当初３人で始まったものの、人数が次々に増え、夏休みの頃には１２人にまで部員がふくらんだ。部の名称も、環境部では「カタい」とのことで、人と人とのつながりも大事にしたいという趣旨から、「エコ・コミュニケーション同好会」ということにした。普段は単に「エコ部」とか「ＥＣＣ」と略称している。

ＥＣＣができたことで、本校の「菜の花エコ・プロジェクト」や「西淀川ＥＣＣ」と有機的な連携が容易になってきた。またそれだけではなく、部員の中からは、「学校をよくしたい」「世間から見られているイメージを少しでもよくしたい」という気持ちから、地域の清掃活動を活動の軸にすることになった。

活動を行うことで少しずつ輪が広がり、さまざまな人たちと本校生徒たちのつながりが生まれた。またお互いに学びあう場面も多く、本校生徒のみならずお互いが力づけられた。さらには地域の人たちに生徒の活動が徐々に伝わり、環境問題に対する地域の解決課題として「菜の花エコ・プロジェクト」が広まりつつある。

# 談話でつづる西淀川ESD

～ 西淀川ESDに関わった３人の方

## 緑の募金で菜の花種の配布

山本康子さん（ガールスカウト大阪府26団）

関西スーパー大和田店で緑の募金をガールスカウト、高校生、中学生と一緒に実施（2008年９月）。一緒に菜の花の種も配りました。

ガールスカウトは幼稚園年長年齢から高校３年相当年齢までの少女とそれにかかわる大人で、主に、社会教育をプログラムし活動しています。内容は幅広く、最近では環境や難民問題まで　世界に目を向ける事に指示されています。私は、少女たちが「宇宙船地球号」の乗組員として思考できる大人になる様にと思って接しています。

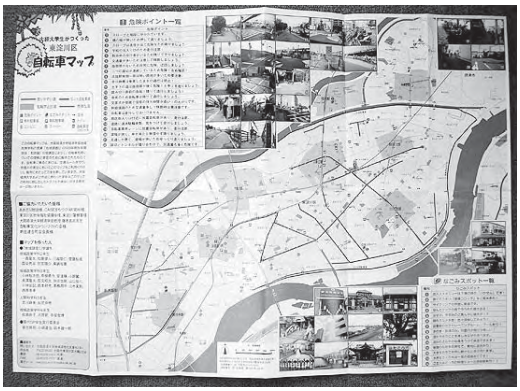
少女たちが出来る活動は……と考えたところ、毎年春に行っている「みどりの募金活動」をして、「菜の花プロジェクト」の協力ができないかと考えました。少女たちが、目立つ制服姿で活動は西淀川区民に知ってもらえるキャンペーンになるのではと。

ＥＳＤでの話し合いで、種を配布するなら、秋がいいと言うことで、実施しました。結果は大成功！たくさんの人に呼びかけることができました。学生たちとの初めての募金活動も新鮮で楽しかったです。

参加した少女たちのようすをみていると、大人たちとの関わりより　年齢の近い高校生たちと関わっているときの方が、より、目を輝かせていることに気づきました。子供たち、自らの声を出す力は、青少年同士の交流によって生まれていくのでは思っています。

## 東淀川区自転車マップ

柏原　誠先生（大阪経済大学）




大阪経済大学生が作った東淀川区自転車マップ

東淀川区自転車マップづくりは、以前から地域を調べるのに地図作りが有効なこと、西淀川高校の生徒が西淀川区の自転車マップを作ったことを知っていたこと、環境にやさしい交通機関として自転車に関心があったことなどから、本学の実習型授業である地域調査Ⅰに取り入れてみようと思いました。

限られた授業時間のなかで、土曜日半日使った実地走行を３回、地元の個人や団体へのヒアリングを通じて、地域を学び、自転車のスマートな利用を考えることができたのではないかと思っています。

また、学生の自転車に対する理解も深まったのではないかと思います。正直言うと、最初は自転車が本来どこを走るのが正しいのかも理解できていませんでした（正解は、自転車も車両なので原則車道の左側。一定条件を守れば歩道を走れる場合もある、というもの。）これからは、市民として自転車を賢く利用できるようになってもらいたい。このマップをきっかけに「自転車」や「わがまち」のことに関心を持ってほしいと思います。

（『平成20年度国連持続可能な開発のための教育の10年促進事業に係る業務報告書大阪市西淀川地域』より抜粋）

# 「緑陰道路サロン」と出前授業

天野憲一郎

「緑陰道路サロン」の経過報告は後にあるように09年5月の取り組みで、計6回の取り組みをしてきました。総計で165名の参加者があります。

## ここに至るまでは

まず退職時の勤務校・姫里小学校で、総合の学習の取り組みとして「環境」を取り上げ、財団の方や患者会の方を直接お迎えして、お話を伺う授業を実施しました。

話していただいたことを基に、もっと詳しくグループごとの「調べ学習」に発展させ、秋の学習発表会で講堂を使って報告したことが思い出されます（写真左上）。その当時は精一杯で、無我夢中の取り組みでしたが、今日ではもう同じ実践は難しいだろうと思います。

さらに、その取り組みの発展として、2年生の生活科の授業として「緑陰道路で遊ぼう」を西淀自然文化協会の皆さんをお招きして学年行事として取り組み、その次の年度は校庭に隣接したコミュニティ広場での四季の変化を見つける観察に取り組みました。

退職時に、それらの取り組みを冊子「西淀川の自然と歴史にふれあおう」として纏め上げることができました。西淀自然文化協会の村瀬りい子さんや以前に姫里小に勤務されていた田村献治さん・元佃西小学校勤務の撫坂博史さん・公害と環境教育の先輩であり元歌島中学校勤務の西口勲さんの協力で、全部で64ページの教材として完成しました。足掛け3年間の取り組みでしたが、地域学習に必要な教材を「作り上げる喜び」を実感する経験を財団の皆様のご支援で実現することができました。自分の担任する児童の活動の様子を冊子にするわけですから、使用する写真に登場するすべての児童の保護者に、写真の使用許可を頂く手紙を送る経験もしました。出版の際には、全員に礼状をつけて冊子を贈りました。

## 出前授業を追求しながら

出版するだけでなく、いかに多くの読者を獲得できるかが重要と考え、取り組んだ一つが「出前授業」でした。公害患者会やあおぞら財団のみなさんをゲストティチャーとして受け入れてきた経験から、学校での授業を重視しました。勤務校や冊子を採用していただいた学校を訪ね、5年生の社会科・産業の学習の場面で授業をしてきました。もちろん、財団の教材ビデオ「手渡したいのは青い空」と「公害学習パネル」を活用して、姫里・出来島・香蓑で授業をさせていただきました（写真右）。冊子はすべての区内の小学校へ案内し、5校が公費で採用していただくことができました。この「出前授業」は毎年、これからも追求して行こうと考えています。今年度の授業予約も頂いている学校もあります。

## 広く市民の中に

教材として出版したわけですが、その内容は広く市民と共有したい内容です。冊子を広げるために、朝日・読売・毎日・産経・大阪日日などの新聞への掲載を追求しました。その結果、朝日・読売・大阪日日が記事を掲載していただけました。さらに、「テレビ・メディアへの登場」を考えた結果、ケーブルテレビのベイコミュニケーションで報道していただくことができました。後で記述する「緑陰道路サロン」の取り組みとともに、丁寧に冊子を紹介する編集に感激しました。

**大野川緑陰道路**

大阪市西淀川区を南北に貫く3.8kmの歩行者・自転車専用道路。1969年、川を埋め立てて高速道路にしようという計画に対し、大気汚染に苦しんできた区民が反対運動。緑の遊歩道として整備された。高木約1万本、低木約12万本が育ち、クルマに出会わずに区内を移動できる快適空間として親しまれている。

## 緑陰道路サロン　経過報告

08年5月 1日　「西淀川の自然と歴史にふれあおう」発行
それまでの実践の成果を集大成して。

08年6月 7日　第1回イベント　「緑陰道路の今と昔をたずねよう」
小田康徳教授（大阪電通大・エコミュージアム館長）
朝日　読売　大阪日日　ケーブルTV・ベイコム
参加者33人

08年7月 5日　第2回イベント　「緑陰道路の自然観察とこれから」
西淀自然文化協会（歌島橋から緑道の自然観察とエコ工作）
参加者62人（大人35人・子ども27人）

08年9月30日　第3回イベント　「緑陰道路の歴史を歩き・学びます」
中島大水道跡の歴史ウォーキング（解説　田村献治）
「古文書から見る中島大水道」小田康徳教授
参加者13人

09年2月 7日　第4回イベント　「西淀川と淀川・大阪城の再発見」
「再発見～淀川・大阪城の歴史」（土井三郎　歴教協）
「中島大水道と農民の生活」　小田康徳教授
参加者15人

09年3月14日　第5回イベント　「緑陰道路で春をさがそう」
福駅から緑道の自然観察ウォーキング　西淀自然文化協会
参加者10人

09年5月23日　第6回イベント　「水郷の村跡・野里の街歩き」
野里の歴史探訪ウォーキング（あおぞら財団　小平智子）
登録文化財・池永家の解説（郷土史研究家　池永悦治）
「緑陰道路サロン」総会　会則　役員体勢確認
参加者32人　総合計165人

冊子は梅田の清風堂書店と区役所前の喫茶サザンカ、教え子も営業に参加する居酒屋に置いて拡げることができました。

## 緑陰道路のフィールドワークと古文書の学習を視野において

冊子の製作を通じて、中島大水道の掘削と緑陰道路の歴史をより詳しく知る必要に直面しました。「現在の緑陰道路の四季を通じての自然観察と、緑陰道路と中島大水道の歴史を学び先人の偉業にふれる。」その活動から、より深く西淀川の環境を考えることができるよう、連続した取り組みを考える必要性が生まれてきたように思いました。冊子をともに作り上げた皆さんの協力で「緑陰道路サロン」を起ち上げて08年6月に第1回目のイベントを実現しました。喫茶サザンカを会場にできたことも良かったと思っています。（余談ですが、姫島小当時の教え子がこの喫茶店で落語会を開催し、参加者を広げる協力をしています。）

喫茶サザンカで

09年5月の第6回目の取り組みで、「サロン」は正式に会則と役員体制を持つ団体として発足できました。この09年度の最初の取り組みとして、野里地域の池永家を訪問し、池永悦治さんの保存する資料の数々を解説いただくことができたことが画期的なことと思います。

池永家で

冊子は5月の時点で860冊を広げることができ、1000冊の完売に近づいています。今年度は「助成金」の獲得をめざして、より広い層への広報と古文書の学習を通じて、より詳しく歴史の事実を掘りおこして記録する活動を目指したいと考えています。

全員集合

夏には教職員の全国規模の研究会があるので、環境教育の取り組みとの交流も実現できそうです。

（あまの・けんいちろう　四貫島小学校教諭）

# ほっとニュース

## 四日市公害市民塾のエコミューズ視察

5月15日（金）に四日市公害市民塾のみなさんが「西淀川・公害と環境資料館・エコミューズ」に来訪しました。

はじめに財団スタッフの鎗山がパワーポイントを使いながら財団について説明し、西淀川公害のDVDを観ました。その後語り部の豊田鈴子さんからのお話がありました。

この日もあまり体調はよくなかった豊田さんですが、公害の被害を伝えるため、頑張ってお話ししました。

同じく公害を経験してきた四日市のみなさんは、豊田さんの話に大きくうなずいたり、四日市での被害を話したりと熱心に聞いていました。また、資料館運営についても色んな質問が出されました。お互いのことを交流することも大事ですね。遠路はるばる四日市からお疲れ様でした。

## エコミューズ開館3周年記念　まちあるき

西淀川・公害と環境資料館（エコミューズ）では、開館3周年を記念して4月4日（土）に「第3回　みんなで歩こう西淀川の歴史めぐり」をおこないました。あいにくの雨でしたが、小学生を中心に12名でスタート。国道43号を渡って、神社、漁港、工場地域などを歩きました。「福の町は空襲を受けていないから古い町が残っているのがわかりました」「きれいな町になってほしい」などの感想がありました。

## タンポポで地域の自然度を調べよう

4月25日（土）、毎年恒例となった大野川緑陰道路での「たんぽぽ調べ」を予定していましたが、雨天のためあおぞらビルで学習会を行いました。（参加者58人）

まずガールスカウト26団の子供たちがタンポポの一生や見分け方を、手作りパネルを使って発表しました。また、学童保育所の平良指導員が企画した、「緑陰道路ビンゴ」のゲームで会場は盛り上がりました。ビンゴの賞品はタンポポコーヒーと緑陰道路でとれたヨモギを使ったヨモギ団子です。学童法保育所の指導員たちのお手製団子に子どもたちは大喜びで食べていました。

参加者には調査シートを渡し、各自タンポポ調べをするように呼びかけ解散となりました。

## 自転車まちづくり交流イベント2009「自転車はどこを走るのか」

4月26日（日）、自転車文化タウン町づくりの会主催による自転車まちづくり交流イベント2009を行いました。

午前中はプレ企画として「大阪・おしゃれでおいしいパン屋巡りツアー」を行いました。参加者18名が3チームに分かれて、大阪の近代建築などを見ながら4店舗をまわり、それぞれ購入したパンを靱公園で食べました。午後からはイベント本番です。会場の大阪府社会福祉会館には29名の参加者が集まりました。今年のテーマは「自転車はどこを走るのか」です。

まず、話題提供として、視覚障害者、車椅子利用者、自転車利用者の方の自転車の走り方に対する問題提起がありました。次に、グループにわかれて意見交換を行い、参加者同士が自転車走行環境に関する課題を出し合い共有しました。

# リレーエッセー

## 「想い」を伝える仕事

池田　風弥

あおぞらビルの6階の別室書庫に所蔵された、西淀川公害裁判に関わる膨大な資料を初めて仰ぎ見た時、思わず驚嘆の声を上げた。

西淀川で暮らす私がボランティアとして、別室書庫の未整理の公害訴訟に関する資料の整理・保存を任されたのは、大学生活2年目。博物館学芸員を志しながらも、将来の進路をおぼろ気にしか考えていなかった去年の秋の事だった。

西淀川公害に関する研究報告書、当時の被害を今に伝える新聞や雑誌、膨大な数の直筆の署名、訴訟運動で使われた「たすき」etc.これらの資料を整理し、保存用の封筒に詰め、専用の文書箱（もんじょ）に保存する。資料を壊さないように慎重に作業を進めるが、単調で地味な作業は少ししんどい物があった。しかしその全てに、ある目的への人々の「想い」を見る事が出来る。かつて「公害のデパート」と呼ばれ、多くの公害被害者を出した町。そして「あおぞら」のために闘った人達が築き上げた町。時間の経過が、公害を取り巻く「想い」を過去に追いやるが、膨大な資料にこめられた「想い」こそ、今の人達に伝え続ける必要がある。

年が明けた今年はアルバイトとして、地域の小学生への環境学習、JICAヤングリーダーとの交流と言った博物館学芸員の活動に類する、より専門的な仕事に従事する機会を頂いた。現在は、就職活動のため財団での活動から離れているが、財団での活動は将来を見つめる上で大きな意義があった。博物館の奥で研究を重ねるだけでなく、博物館を通じて何かを知ろうとする人達に対して、最前線に立って「想い」を伝える。こうした学芸員としての将来像を描きながら、再び自分が育った地域に貢献するべく、大学での勉強を続けている。

（いけだ・ふうや　佛教大学　社会学部　公共政策学科3回生）

＊このコーナーでは、あおぞら財団で一緒に活動するスタッフの近況報告をかねた一言を紹介します。

## お知らせ

**矢倉海岸定例探鳥会**

（日本野鳥の会大阪支部との共催）

日時　9月5日（土）午前9時30分～午後12時30分頃（現地解散）

集合　阪神電鉄西大阪線「福」駅改札口　午前9時30分

場所　矢倉緑地公園

＊8月の定例探鳥会はお休みです。

**あおぞら財団「ボランティア」の日**

毎月第1金曜日はあおぞら財団ボランティアの日です。

環境NPOの仕事を体験してみませんか？

お問合せ、お待ちしています。

### おねがいとおしらせ

リベラへのご意見・ご要望または投稿をお待ちしています。また、メール通信「あおぞらEXPRESS」を開設しています。ぜひご利用下さい。

配信を希望される方は

http://groups.yahoo.co.jp/group/aozora-mail/

から登録できます。

## お礼

（2009年4月・5月　敬称略）

**●寄附・寄贈者**

石井とおる、王明哲、大阪ガスビジネスクリエイト、大阪府みどり公社、岸野かしこ、神戸大学人文研究科倫理創成プロジェクト、神戸大学文学部、児島公民館、後藤麻美、こどもエコクラブ、清水万由子、特定非営利活動法人 市民フォーラム21・NPOセンター、水平社博物館、株式会社宣伝会議、高田研、津下佳世、帝国書院、豊中市、中村昌史、広川禎秀、三重県地球温暖化活動推進センター、三次市立十日市小学校、南聡一郎、宮崎悦子、村松薫、山中啓子、四日市公害市民塾、立命館大学国際平和ミュージアム、歴史伝承委員会

**●お助けボランティア参加者**

浅井真二、大野みさ子、岡崎久女、小田直寿、蒲原ヨシ子、前田浩輔、宮本由貴

**●入会ありがとうございます**

株式会社浅羽計器、大阪航空燃料輸送株式会社、岡弘運輸株式会社、株式会社シンワ・アクティブ、松本宣嵩、山中啓子、山本康子

## 事務局日誌

**4月**

1日(水)　(財)淀川勤労者厚生協会新人研修見学受入
4日(土)　第3回みんなで歩こう西淀川の歴史めぐり
　　矢倉海岸定例探鳥会
6日(月)　西淀川地域再生研究会
7日(火)　拡大事務局会議
8日(水)　てづくりせっけん教室
9日(木)　豊中市史調査
10日(金)　資料館定例会議
　　梅田北ヤード委員会　講演会(参加)
13日(月)　広報会議
14日(火)　事務局会議
15日(水)　ECOまちネットワーク・よどがわ
　　道路環境市民塾運営会議
16日(木)　国際教育セミナー　第1回準備会
17日(金)　資料館スタッフ会議
　　アルバイト面接
19日(日)　緑の募金活動、西淀川高校お花見
21日(火)　事務局会議
　　台湾・環境保護活動家　李秀容さんとの交流会
　　子どもの参画べんきょう会
22日(水)　自転車寺子屋
23日(木)　大阪大学講義
24日(金)　緑陰道路サロン世話人会
25日(土)　たんぽぽ調べ
26日(日)　自転車まちめぐりツアー、自転車まちづくり交流会2009
27日(月)　将来構想検討委員会
28日(火)　事務局会議
30日(木)　スタディツアー第1回総括会議
31日(金)　市民環境調査隊事業運営業務委託に係る公募型企画コンペ実施説明会(参加)

**5月**

2日(土)　矢倉海岸定例探鳥会
7日(木)　公害療養相談会（参加）
　　広報会議
　　あおぞらプロジェクト事務局会議
　　きんき環境館パートナーシップ団体説明会（参加）
8日(金)　リベラ発送
12日(火)　徳島市環境リーダー活動報告会（企画・運営）
13日(水)　自転車文化タウンづくりの会　幹事会
　　拡大事務局会議
　　資料館定例会議
　　ECOまちネットワーク・よどがわ
14日(木)　西淀川公害患者と家族の会役員会（報告）
　　フードマイレージ教材化研究会
15日(金)　四日市公害環境市民塾受入
17日(日)　地球環境基金説明会（参加）
18日(月)　監査
19日(火)　事務局会議
　　公害療養相談会（参加）
　　道路環境市民塾運営会議
20日(水)　あおぞらプロジェクトデータ入力
23日(土)　第6回緑陰道路サロンイベント
25日(月)　ポッポ第二保育所フードマイレージ説明
26日(火)　事務局会議
　　子どもの参画べんきょう会
　　全国まちづくり委員会（参加）
27日(水)　西淀川ESD会議
28日(木)　あおぞらプロジェクト幹事会
29日(金)　イ病スタディツアー下見（～30日）
　　第34回公害被害者総行動結団式（参加）

**【編集後記】** 豚インフルエンザの影響で、中学校の修学旅行や校外学習が中止になった。休校による授業時間の不足は受験生にとってはより深刻で、授業時間補うために土曜日に登校させたり、夏休みを短縮したりしている。うちのせがれもそのひとり、実力テストに中間テスト、1ヵ月も空けずに期末テスト…聞いてる方がうんざりするほどだ。梅雨には「中休み」があるが、彼らには休み無しの熱い日々が続く。体こわすなよ。（T）

『Libella』No.109　2009年7月号（隔月1日、年6回発行）
発行所　（財）公害地域再生センター（あおぞら財団）
編集人　上田敏幸
大阪市西淀川区千舟1－1－1　あおぞらビル4階
Tel.06-6475-8885 Fax.06-6478-5885
http://www.aozora.or.jp/
E-Mail webmaster@aozora.or.jp
印刷所　あゆみコーポレーション
定　価　一部400円（郵送料込み）
会員の購読料は会費に含まれています。
郵便振替口座　00960-9-124893（加入者名　あおぞら財団）
乱丁・落丁はお取り替えします。本紙掲載記事の無断転載を禁じます。

Bohchu Ippitsu
一忙筆中

蒲田（かばた） 雄輔（ゆうすけ）

財団関連の活動のほか、以前に住まいの吹田市で総合計画やローカルアジェンダの策定・活動に、現住の茨木市で環境教育ボランティアやコミセン設立などに、それぞれ参画。「信なくば、立たず」を信念とされ、熱い思いのはつらつシニア。昭和11（1936）年・大阪生まれの大阪育ち。

# 向う三軒両隣のコミュニケーションが…クルマ社会になってすっかり変貌してしまった

## 10万自由時間からの市民活動

商社勤めによる3回の海外駐在で異文化に接したり、日本に戻ってくると学生時代からかかわりの大学準硬式野球連盟役員に引っ張り出されたり、定年直前には仲間の転職支援に携わってキャリアカウンセラーを経験するなか、ある機会に、サラリーマン生活40年間で勤務に拘束された時間と人生80年でセカンドライフ20年間の寝食を除いた自由時間とが、ほぼ同じの約10万時間であることを知った。(*)

この貴重な時間に思いを致すとき、自分なりにボランティア活動や市民活動への心が働き、その一つに「交通まちづくり」があり、ここ「あおぞら財団」に事務局の労を執ってもらっている「道路環境市民塾」や「自転車文化タウンづくりの会」で仲間に加えていただき、有意義なセカンドライフを過ごすことができている。

## 「交通まちづくり」で思うこと

その「交通まちづくり」活動で日ごろ感じているところがあるので、折角の紙面なのに拙論で恐縮だが、以下に触れさせていただくことにする。

それは、「みち」について、日本と欧米、特にヨーロッパとの文化の違いが見られる点である。

まず、「みち」の名称と番地表示が違う。欧米では、表通りだけでなく、裏通りや路地にもそれぞれに名称が付いており、その「みち」を挟んで左右の番地が奇数・偶数に使い分けされている。これに対して日本では、表通りで並木などがあるところに通称が付いているのを除けば、ほとんどで名称がなく、その「みち」を挟む左右で町名・丁目の異なっていることが多い。（だから、初めての地を訪ね、欧米で苦労するのはまれだが、日本では探し回るのが通常。）

## 「みち」は、歩く人本位の都市空間

そして、「みち」の生い立ち・価値観でも違う。そもそも「みち」の起源は、歩行者専用のものであり、日本でも、昔は宿場をつなぐ街道があって門前町も発展しており、数十年前までは通りに床机（しょうぎ）を出して向う三軒両隣のコミュニケーションが存在したが、クルマ社会になってすっかり変貌してしまった。

ところが欧米では、まちなかのあちこちにモールといわれる広場があり、いろいろな形態があるものの、いずれも歩行者空間に違いがなく、これらのモールをつないでいるのが「みち」だと考えられる。

日本の「みち」は、住区を区切る基になり、人の通路やモノの運搬路とはいえ、クルマ優先の通行空間であり、欧米の「みち」は、まちを形成する基になり、モールを行き交う歩く人本位の都市空間で、正に「交通まちづくり」の根幹を成している。これらの違いが国の政策・施策に反映していると思われるのだが、小生の思い違いだろうか。

（*）
現役時代の勤務拘束時間＝
10時間／日×250日／年×40年＝
100，000時間
セカンドライフの自由時間＝
14時間／日×365日／年×20年＝
102，200時間